

光太夫の伊勢参り

大黒屋光太夫は、帰国から10年後に里がえりを許されました。光太夫は、里帰りに際して伊勢神宮にも参詣したいと幕府に願い出ており、鈴鹿に到着すると早々に10日程の日程で、伊勢詣でに出かけました。参詣したのは、両伊勢神宮・伊雑宮・二見・朝熊山金剛証寺・青峰山正福寺・丸山庫蔵寺です。村役人の喜右衛門と甥の彦太夫が付き添いました。

江戸時代、この地方の廻船のほとんどは、伊勢神宮の神棚を船に積んで航海していました。光太夫たちが乗っていた神昌丸にも、伊勢神宮の神棚が積んであり、光太夫たちはロシアでもそれを大切に持ち歩いていました。光太夫の口述を中心にまとめられた「北棧聞略」には、次のような記述があります。

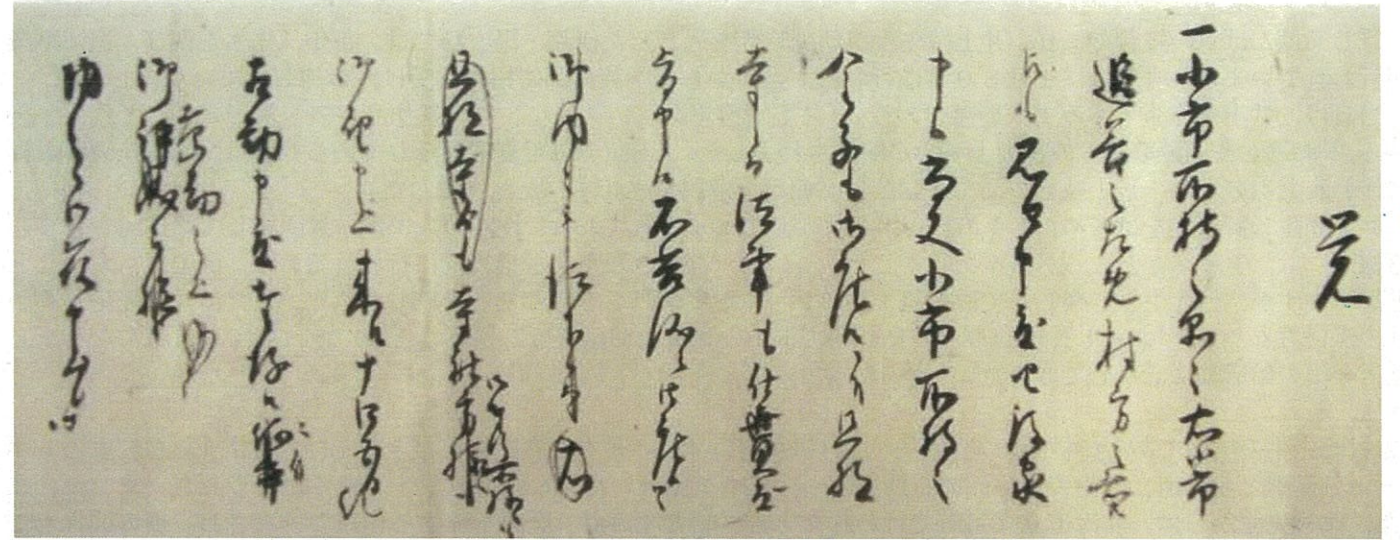
- 漂流中の海上で…
「このように海上に漂っては、いつ死ぬか、どこに着くかもわからないので、太神宮（伊勢神宮）のおつげで 陸との距離を測ろうということになり、みくじを引いたところ、二回とも六百里と出たので船中の者は一同に色を失いました」
- 漂流後辿りついたアリューシャン列島のアムチトカ島で…
「夜になると磯辺の岩屋に入り、伊勢神宮の神棚を小高いところに安置してから眠りにつきました」

船乗たちは、難船してからも伊勢神宮の神棚を大切にしており、伊勢神宮への信仰は厚いものがありました。光太夫が、十年ぶりの帰郷の際に、伊勢神宮への参詣をとくに願った背景には、このような船乗りの厚い信仰がありました。

また、光太夫は、1カ月の帰郷を終えた後、関の地藏院に立ち寄り、江戸へと旅立っています。



収蔵資料の紹介



現在残る小市の遺品

一 小市所持の品々右小市
追善のため村方之者
えも見七申度由後家
申候尚又小市所持之
金子も御座候二付旦那
寺二而法事も仕貴度
旨申候不苦儀二御座候ハバ
御内々に被仰下候付付右
旦那寺よりも寺社方様へ御奉行所様え
御届申上来ル十四五日頃
相勤申度奉存候奉二付
御許儀被遊候考許之段勘之上
内々御窺申候以上

小市の遺品を、小市の供養のために村の人びとにも見せたいと小市の後家が言っています。また、小市の持っていたお金もございませうので、菩提寺で法事もしてもらいたいと言っています。とくに支障もないことなので、菩提寺から寺社奉行様へ御届け申上げ、十四・十五日頃に法事を行いたいと思っております。御検討くださいますようお願いいたします。

この資料は、小市の遺品を巡る古文書の一つです。小市の遺品の披露をするために、村役人が書いた伺書の下書きです。持ち主である後家（けん）が、小市の追善のために村人へ遺品を見せたいと言っているのだから、内々にお伺いしますということが書かれています。校正の跡から、村役人が入念に言葉を選んだことがわかります。

小市の遺品は、このように、小市の追善供養という名目のもとで村人に披露されたようです。最初は、小市の菩提寺である宝祥寺で、若松の村人へ公開するために追善供養と銘打った法事・展覧会が行われましたが、やがて、同様の追善供養とは名ばかりの見世物は、津や四日市、さらには名古屋や京都でも開かれるようになります。村では遺品の貸出料を定め、小市の遺品は村を潤すことにもなりました。

江戸時代は、外国の情報を公開する事などできなかったと思われがちですが、実は、このように名目さえ整えば、外国渡りの品物を見世物とすることも可能でした。

22年度報告

- ★データ 入館者数…4829人 開館日数…252日 平均入館者数…約19人/日
- ★展示活動 春の企画展「光太夫の里がえり」・夏の企画展「知っておどろき！大黒屋光太夫！！」
開館5周年記念展「海のむこうへのあこがれー漂流記と漂流文学ー」・冬の企画展「光太夫とロシア文字」
- ★印刷物 開館5周年記念展図録/大黒屋光太夫記念館だより「大光」10～13号/子ども用ワークシート
- ★その他事業 11/14 開館5周年記念事業 バラライカミニコンサート&「おろしや国酔夢譚」「大黒屋光太夫」朗読会